

心に刻んでおこう！

お世話になりました

専大を去る8人の先生方が伝えたい言葉とは

我が生涯最良の日々

経済学部教授 毛利 健三

現役生活最後の10年を専修大学で過ごせて幸せだった。我が生涯の最良の日々に気持ちいい職場の存在感は大きかった。教職員の皆さん、本当に有難うございました。

人真似は嫌いなので専修大学は「永遠です」とは言わないが、前途は洋々として無辺。無論、大学冬の時代に油断は大敵。全学 一丸、春をよびこもう。さりとして 大政翼賛は大学の自殺行為。難関に臨んでこそ、談論風発、異論に寛容(「討議的民主主義」と行きたい。公開・公正・公平の旗高く、堂々と我が道を往け。

さて小生はターミナル・フェーズ、正真正銘の「冬の旅」へ出立。「発憤忘食、樂以忘憂、不知老之将至」、聖人の驥尾に付すべきか。凡愚の徒輩、とても無理。せめて食を忘れず、認知障害の繰延に専心すべきか。分裂気味のこの頃である。

(もうり・けんぞう) 経済学博士。1995年経済学部教授。図書館長などを歴任。主な担当は世界経済史。

学問研究の大切さ

法学部教授 隅野 隆徳

教員として本学に42年勤務した間、多くの教職員の方々、そして多数の学生諸君に支えられ、励まされて今日に至ったことになによりも感謝したい。その間のたくさんの思い出の中で特に印象的なこととして、まず大学では当然のことながら、研究に基礎づけられた教育の大事さを、本学の在外研究と国内研究の後の授業で痛感した。

在外研究では私の場合、私費留学と合わせ2年間でイギリスで過ごし、日本を国際的視野で観察することが出来た。また国内研究ではレベタ訴訟最高裁判決に出会い、帰学後の憲法Ⅱで以後、裁判傍聴記を受講生に書いてもらうことになった。そして私のゼミナール学生からは一年に一本ずつ自ら選ぶテーマで専門の論文を書くことにつき、好評を得てきた。

(すみの・たかのり) 1963年法学部講師、68年助教授、75年教授。法学部長などを歴任。主な担当は憲法Ⅱ。

「情報からの自由」を！

法学部教授 中田 保

私は情報依存症になっている、今の若者たちと子供たちが心配です。次のことを試してください。

1・テレビ、ビデオ、ゲーム、ケータイ、パソコン、ヘッドフォンからの「絶縁時間」を作る。
(空白で気が狂いそうになる？ それがいいのだ)

2・はだしで土を踏む。木のみどりや草花を見る。空と雲を眺める。風の音、鳥の声を聞く。

3・友だちと話す。誰もいないところで大声で叫ぶ。歌を歌う。声を出して本を読む。(英語を読めば英語の力もつく)

4・ジャンクフード、ファーストフードをやめて「手作り料理」的なものを食べる。

5・詩を読む。「老子」を読む。絵を見る。スポーツをやる。ボートとする。

(そしてまた、新しい人生に立ち向かおう！)

(なかだ・たもつ)1973年法学部助教授、79年教授。LL研究室分室長などを歴任。主な担当は英語。

試練もその後の糧となる

経営学部教授 中山 雅博

いつの時代でも人の一生には、何をやっても物事がうまく推移する順調な時期もあれば、うまく事が運ばない逆境の時期もある。これらの変化があらかじめ予測出来れば何らかの対策をとることも出来ようが、多くの場合、突然にやってくるので始末に困るのである。

我々の年代は第二次世界大戦を経験し戦争中の爆撃により家族や財産を失った人が多い。戦後の食糧難や生活基盤の確立に両親を助けて働いた人も多い。私もそのために大学進学が人より遅れた。この少年時代のつらい経験が学問研究だけでなく、学生の相談・指導や中小企業の経営指導に際し、大いに役立った。

皆さんが人生の試練に遭遇した時に、それに負けたり挫折することなく、そのつらい、悔しい経験を糧として、その後の人生に役立ててください。

(なかやま・まさひろ)1969年経営学部講師、70年助教授、76年教授。経営研究所長などを歴任。主な担当は原価計算。

目標定め完全征服を

商学部教授 川口 順一

専修大学を定年で去るに当たり、学生諸君に二つのアドバイスを残したいと思います。

一つは大学での勉強の仕方です。大学では総花的な優等生になる必要はありません。そうではなくて、一点集中型の勉強をお奨めします。一つの目標を定めて完全征服を目指して情熱を燃焼させる。そこから充実感、達成感、自信が生まれます。この心理的効果は大きい。この核が出来れば、補充すべき周囲の問題が自ずと明らかになり、放射状的に拡充していくでしょう。

二つは精神的充足です。

学生時代に文学、美術、音楽、哲学、歴史などに親しむことを覚え、情操を豊かにし知性を磨くべきです。社会は専門バカを望みません。高い教養に基礎づけられた深みのある人間を求めています。名調教師のもと、多くの名馬が育つことを祈ります。

(かわぐち・じゅんいち) 1978年商学部教授。大学院商学研究科長などを歴任。主な担当は財務会計論。

思い出すままに

ネットワーク情報学部教授 蔵下 勝行

1967年(昭42)の春、6年間勤めた日本道路公団を退職し、専修大学経営学部専任講師として教壇に立った。爾来、38年経った。この間に、日本の政治、経済も大きな変動を体験した。

大学もこの大きな変動から免れることは出来なかった。しかし、大学紛争、激しい学生運動の激動の時期が沈静化すると、学生から若者特有の熱気が次第に希薄になったように感じたのは私一人であったのだろうか

同時に、学生の学問に対する熱意も次第に退化したように感じた。これに伴い、教師の教え方も変質を余儀なくされ、学生の変化に迎合するような変貌も見受けられた。

学生の学問に対する気迫がこれ程脆弱になると将来が思いやられると危惧されている。これは「定年退職者の僻み」と強い否定の行動を期待している。

(くらしも・かつゆき) 1967年経営学部講師、70年助教授、76年教授。2001年に所属変更。情報科学研究所長などを歴任。主な担当は「経済のモデル(マクロ経済学)」

SPSの理念と共に

文学部教授 岡澤 宏

私の場合、専大での思い出の中心は教室での勉強よりも課外活動への援助に最大の力を注いだことの方にある。在職中の約半分は学生部の委員を務めたからである。それは学園紛争を「SPS(スチューデント・パーソナル・サービス)」の理念によって治め、助育理論に基づく多くの選択肢を提供し、雑多なニーズに少しでも応えようと努力した思い出である。最大の成果は「教授・学生交歓セミナー」であり、これによって全学生が学部の枠を超えて進路を話し合った。その結果は校友と現役学生とが密着し、大学全体の発展につながったと思っている。つい先日も「昔の仲間と語り合う会」から会合への参加を私に求める葉書が来た。卒業したら終わりなのではない。だから学生諸君に贈る言葉は、今のうちになるべくたくさんの仲間を作りなさい、ということである。

(おかざわ・ひろし) 1966年文学部講師、68年助教授、74年教授。学生部長などを歴任。主な担当はロシア語。

社会人としての心得

文学部教授 服部 俊

専修大学の教員となって42年になる。長いようで短い期間であった。この間、私の心は「休講はしない」という信念で勤めてきた。このことは、人に迷惑をかけない心、思いやりの心でもある。卒業される皆さんに以下の心得を期待したい。

「はい」(素直な心)「すみません」(反省の心)「おかげさまで」(謙虚な心)「させていただきます」(奉仕の心)「ありがとうございます」(感謝の心)など、「よき心」の灯で一隅を照らしてもらいたい。また、健康を維持するためには非常な努力が必要である。その第一歩が食生活・休養・運動の3原則である。日記をつけて、血圧・BMI・健康診断のメモを習慣づけることである。社会に対しての報恩奉仕は「献血」と「骨髄バンク」に協力することである。健康に感謝している。

(はっとり・たかし)1963年講師(経済学部・65年商学部、66年文学部に所属変更)、71年助教授、80年教授。体育部次長などを歴任。主な担当は健康科学論。

依願退職(3月31日付)

宮森孝史経済学部教授(心理学)11年在職

青木みのり経済学部助教授(発達・学習心理学)3年在職

丸山絵美子法学部助教授(民法総則)6年在職

鳥羽至英商学部教授(会計監査論)27年在職

矢澤秀雄商学部教授(管理会計論)25年在職

廣中直行文学部教授(学習心理学)4年在職

【ニュース専修2005年3月号2面】